障害児教育にチャレンジ⑨『障害児のための音楽・リズム』

山本久美子（山梨県立甲府養護学校）

知的障害児の学級や学校においては、子どもの実態は様々であり、一人ひとりの障害の状態や発達段階を考慮した教育が必要とされている。音楽においても音の感じ方や受け止め方、また表現の仕方は様々である。従って、子どもに即した適切なねらい設定、教材の選択、働きかけや場の設定が、授業を組み立てる上では重要であるといえよう。その際、音楽の機能を十分に理解し、子どもの指導の目的に合わせて、効果的に活用することが大切であると考える。

本書は、知的障害児の養護学校で障害児の音楽・リズムについて熱心に研究し、指導実践している著者によって書かれたものである。各章ごとに発達段階と音楽活動の領域をからめた展開例が中心にまとめられている。

第1章「障害児と音楽・リズム」では、発達段階における音楽の意味や役割、音楽療法や他の教育方法、養護学校の「音楽」の教科書について述べている。また、子どもの発達段階（5段階）を横軸に「聴く」「身体表現」「楽器」「歌」の領域を縦軸に整理した「音楽・リズム」の内容表や実践された年間指導計画も記述されている。

第2章「聴くこと表現すること」では、1段階[ゆっくりしたテンポ等の音楽の中でリラックスする等]から、4・5段階（音楽の違いを聴きとり、全身や体の部分で身体表現する等）まで、発達段階に添って、聴く活動と表現する活動を結びつける8つの展開例が載せられている。

第3章「楽しく歌って」では、発達段階による歌の変化を1段階[発声することが中心]から5段階（歌の内容を理解して表現をつけて歌う）まで示した。「あそびの歌」「身辺生活の歌」「ことばと動作を結びつけた歌」等、教科と領域を合わせた指導や養護・訓練で活用できる教材が例示され、子どもの動きや生活に寄着して作られた作業の曲も取り入れられている。

第4章「楽器を鳴らして」では、楽器が自分の力により大きな表現を可能にすることや子どもの実態に合わせて楽器選びや編曲をする中で、みんなが楽しく合奏できることから、「バンプーオーケストラ」「変化を楽しむ打楽器と旋律楽器の合奏」等が、楽譜やリズム譜、絵で表された曲の構成を使って載せられ、曲選びの参考になる。

第5章「リズムにのって動くこと」では、1[音楽の受容と動き]、2[音楽と動きの認知と実行力]、3[創造的表現力]の段階を考え、動物や乗り物の動き、日常生活の諸動作、歩く・走る・跳ねる等のイメージしやすい動きやリズムを組み合わせて構成されている。「ごろごろ」「四つばい」「走って止まれ」等のリズムと動作の基本や「林間学校へいこう」「動物村の運動会」等の行事に結びつけて展開例等が紹介されている。

第6章「音楽・リズムの展開」では、題材選びの視点と展開に当たつての方法が示された。写真や図、楽譜、指導計画等を用いた具体例「小グループを生かした高等部合奏の展開」等は、実践家の著者ならではの工夫やアイディアに満ちている。

著者は「特に知的障害児の指導において、子どもたちの認知や感情、身体運動の発達、そして精神発達段階を把握し、一人ひとりの面を見つめ、音楽とのかかわり方をとらえ、指導の目標や内容を考えていく必要がある」と述べているが、子どもを理解し、かかわっていく上で大切な視点であると思われる。各発達段階の子どもが様々な授業場面で意図的に活動に取り組むことができるという点で、本書は活用範囲が広く、実践にすぐ役立ち、音楽を専攻した人でなくても理解できるようにわかりやすく展開されている。

（B5版 109頁 明治図書 1997年 定価1,850円）